

第5章 検 討 ―これまでの研究と今後の課題―

本章では、柏木城跡に関して言及されてきた研究を概観するとともに、第3章で述べた柏木城中心部の現地観察の成果をまとめつつ、今後に向けての課題を整理することとしたい。なお先学の方々の指摘等については、研究状況の整理という目的からできるだけ引用文自体も掲載することとした。

第1節 呼称について

柏木城については、第4章第2節でみる文献や絵図等にて以下のような呼称が知られる。

『異本塔寺長帳』天正十二年条・・・・・・・・・・「柏木城」（会津大塩邑柏木山築城）

『会津旧事雑考』卷之七天正十二年条・・・・・・・・「柏木森城」

『富田家年譜』天正十二年条・・・・・・・・・・「柏木森城」

『会津古墨記』・・・・・・・・・・・・・・・・・・「柏木城」

『会津要害録』・・・・・・・・・・・・・・・・・・「柏木ノ森ノ墨」

『貞山公治家記録』天正十三年五月八日条・・・・「大塩城」

『新編会津風土記』卷之五十六大塩村・・・・・・・・「柏木城」

『会津古城之図』・・・・・・・・・・・・・・・・・・「大塩邑柏木森臼城之図」

『会津城墨館図』・・・・・・・・・・・・・・・・・・「耶麻郡大塩邑柏木城」

『耶麻郡誌』・・・・・・・・・・・・・・・・・・「大塩邑柏木城之図」

『小沼組絵図』・・・・・・・・・・・・・・・・・・「柏木古城」

会津では、江戸時代の史料により、「大塩」「柏木山」「柏木森」にある城跡ということで、「柏木城」「柏木森城」「柏木森臼城」などと呼ばれていたことが知られる。伊達氏方では「大塩城」という呼称が使用されており、呼び名が異なっていた。本書では『異本塔寺長帳』や『会津古墨記』などに拠るとともに、今日一般的な「柏木城」「柏木城跡」という呼称を使用した。柏木城中心部は現在の字名も「柏木城」となっている。

第2節 柏木城の築城から廃城

本節では、本書関連調査の報告掲載の高橋明氏と高橋充氏の論考と重複するが、文献にみる築城から廃城までのあらましを簡単にまとめておく。

1 築城

柏木城は、『異本塔寺長帳』・『会津旧事雑考』に天正12年（1584）の築城とみえ、後の『新編会津風土記』や『富田家年譜』でも同様の築城年とする。

「北塩原村の綱取城跡に代わる守りの拠点として天正12（1584）年に葦名氏が柏木城跡を築いた」（石田2001pp98）、とするように、柏木城について言及する先学も多くは同様であるが〔渡部1987、松岡2000など〕、高橋明氏は、同時代史料の検討においては、蘆名氏と伊達氏の間に柏木城築城に踏み切るような出来事や大塩での築城を示すような具体的な天正「12年築城説の根拠は確認できない」（高橋2007pp142）とし、「伊達氏桧原進攻の危険を察知しうるのは天正13年雪解け後のことと考える」

〔高橋2009pp33〕と述べ、当該期の蘆名氏と伊達氏の動向を史料から仔細に検討した上で築城年に関する新たな見解を示している。

後述する遺構の検討では、伊達氏系城館で天正12年頃までに採用されていた「枳形を有しない連続虎口」〔松岡2002〕が柏木城跡にもあることが指摘でき、その点からも天正12年ないし天正13年夏頃の築城について可能性が高まったといえるだろう。

2 築城者

築城者については、伊達家の正史である『貞山公治家記録』などに蘆名氏方の城であることが記載されており、古く遡って柏木城が存在することを示す文献もない。石田明夫氏が指摘するように、柏木城は伊達政宗が会津侵攻の拠点とした桧原城からの会津への進入路となる北・東側に対する防御が手厚いという点からも、会津を本拠とする蘆名氏の城であることが頷ける。

佐竹氏との関係では「天正15年（1587）以後の蘆名氏は佐竹義重の次男の義広が当主であるが、佐伯正廣氏の研究によると、奥羽での佐竹氏の城は、白河市の搦目城や棚倉町の赤館城のように、横堀によって広い駐屯部を備えるのが特徴であり、こうした拠点の城郭から進出した境目の地域では、伝統的な領主層の城をそのまま用いて、積極的な築城の例は乏しい〔佐伯1998〕。このような佐竹氏の城館の運用方法と柏木城は対照的であり、虎口や石の使用の面でも、類似した例は現在までのところ確認できない。」〔松岡2000〕と述べられている点などからも、蘆名氏築城と考えることに無理はない。

ただ『新編会津風土記』における「天正十二年葦名義廣これを築き・・・」という記事については、蘆名義広が蘆名家の家督を継ぐのは天正15年のことであり、天正12年ならば蘆名盛隆であるとすべきことを渡部新一氏〔渡部1987〕や石田明夫氏〔石田2007〕が指摘している。

その頃の会津領主の動きとしては、天正12年10月6日に会津領主である蘆名盛隆が黒川城中において弑逆されて、その後蘆名氏家臣内で伊達氏・佐竹氏を背後とする跡継ぎ問題が勃発するなか、ほどなく佐竹義重が押す亀若丸が家督となる。しかし天正14年11月には疱瘡により3歳で急死、天正15年3月に佐竹義重の次男義広が蘆名家家督を継ぐ。

渡部氏や石田氏の、天正12年築城で「義広でなければ盛隆」という見解については、盛隆死後亀若丸の代での築城も考慮にいれておくべきであろう。ただそうであるとしても幼少の亀若丸が直接築城を指示することはありえず、その頃の蘆名家家臣団により築城が決定・実施された可能性を想定する必要がある。

蘆名義広築城とする『新編会津風土記』については、「義広」との記載が単なる誤記なのか、あるいは同年殺害された「盛隆ではない」という意識がはたらいたものとみるかは今一度検討が必要であろう。加えて、それが天正12年10月から暮れにいたる期間なのか、あるいは高橋明氏が述べるように伊達氏の会津進攻が明白となる天正13年夏のころという可能性についても、今後検討していくべき問題として残されている。

3 城番

柏木城の城番は、蘆名氏から派遣の三瓶大蔵ほかの名が上がる。この点については、本書の高橋充氏、高橋明氏論考を参照いただきたい。

4 廃城

天正17年6月5日、猪苗代からの会津口進攻を企図する伊達方と、それを食い止めようとした蘆名

方が摺上において合戦する。朝10時頃からはじまった戦いは、伊達方の圧勝に終わっている。蘆名義広が本陣を離れ、黒川に逃れ、伊達方に追われるなか、『伊達家日記』同日条によれば柏木城は6日明け方にはすでに将兵が城を離れており自落したとされる。

10日に義広は黒川城を出て、翌11日には政宗が黒川に入る。その後は柏木城に関する記述はとだえることや、伊達方領内となることで境目の城としての役割もなくなり、使用されなくなったとみられている。

第3節 絵図、縄張り図について

1 絵図

柏木城跡を描いた絵図は同時代のものは知られておらず、江戸時代以降のものが数点現存する。

- i 「大塩邑柏木森臼城之図」『会津古城之図』[図5-1]
- ii 「耶麻郡大塩邑柏木城」『会津城堡館図』[図5-2]
- iii 「大塩邑柏木城之図」『耶麻郡誌』[図5-3]
- iv 『小沼組絵図』[図5-4]



図 5-1 「大塩邑柏木森臼城之図」『会津古城之図』（個人所蔵、石田明夫氏提供）



図 5-2 「耶麻郡大塩邑柏木城」『会津城堡館図』（個人所蔵、石田明夫氏提供）

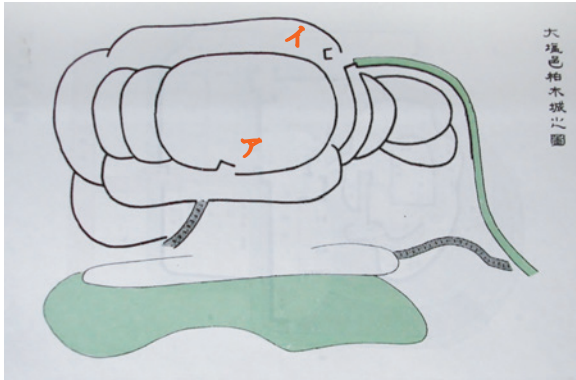


図 5-3 「大塩邑柏木城之図」『耶麻郡史』
絵図にみる虎口アは現状の虎口1、虎口イは現状虎口2に対応するとみられる。ア、イは著者記入。



図 5-4 『小沼組絵図』（北塩原村蔵）
「柏木古城」と記されている。『小沼組絵図』は北塩原村指定文化財。桧原歴史館で展示されている。

i・iiの描かれた時期は不明だが、石田明夫氏は同書記載の他城の図を検討することで、明和元年(1764)から寛政4年(1792)までに書かれたものと推定しており〔石田2007pp49〕、iiiの『耶麻郡誌』掲載の図は文政年間とされる。i・ii・iiiは曲輪や虎口、道などの表現が類似しており、元となる図は同一のものであろう。「江戸時代の軍学者が「城取り」（縄張）の練習に用いたもの」〔北垣1981〕とされる軍学絵図の一種と思われる。

現状と絵図を比較すると、絵図の上を北とみた場合、曲輪1～4、馬出、帯郭1・2とみられる曲輪の配置が類似することが窺える。

虎口については、絵図には虎口アと虎口イの2か所が描かれており、それぞれ現状の虎口1と虎口2（第3章参照）に対応するものとみられるが、虎口1が帯曲輪1への出入口であるのに対し、絵図虎口アは曲輪1への出入口として描かれ、一方虎口2も現状は曲輪1への出入口であるのに対し絵図虎口イは帯曲輪1への出入口として描かれている。このことから絵図の上を南とみて、虎口の配置状況から位置関係を合わせる見方も可能となるが、その場合柏木城跡において中心に配される最も広い主郭（曲輪1）と、その両側で、やや寸詰まり気味の曲輪2・3、細長い馬出・曲輪4という形状・配置面でのバランスが、絵図と現状で一致しなくなる。

また、水路とみられる表現が絵図虎口のイから曲輪の外側を回って下方に描かれている。現状で虎口付近から掘り込まれた空堀・水堀は確認できないが、通路状の平坦面は確認できるので、これに該当するとみることができよう。

一方、別の視点で絵図のこの部分を現状柏木城跡南側谷部（現水田）から西側を廻り北の斜面下方に流下する谷水の流れを表現したものとみれば、絵図の上を南とみた場合における現状との類似点の一つとなる。この場合、絵図の下にある青彩色された水堀表現の箇所は、柏木城跡から北に下った大塩川を表現したものであることになる。

しかし、絵図における全体のバランスや配置の関係からは、この絵図下方の青彩色部分は、現状の柏木城跡南側の谷を当てたほうが自然であり、その場合には、谷と城中心部の間に描かれる細長い曲輪表現の「馬場跡」とされる平場も現状の曲輪6とみることもできるので、絵図は上方を北として描かれたものと理解しておきたい。

なお、絵図では曲輪6該当箇所から帯曲輪南の虎口ア（現状虎口1）付近へ向かう通路が描かれているが、現状では確認されていない。これはこの箇所が後年削平されたことが明らかな削平地2にあたることに起因していると思われ、今後周辺箇所の切岸を発掘することで通路の痕跡が把握される可能性がある。

ivの江戸時代の小沼組の村を描いた『耶麻郡小沼組絵図』には、「柏木古城」として描かれている。『耶麻郡小沼組絵図』は会津藩領内小沼組の範囲を図示したもので、現在の北塩原村大塩地区と北山地区の一部が含まれる。成立年代は不明だが、寛文年間（1661～72）に大塩村15ヶ村に入り、文化年間（1809～17）には小沼組に属していた関屋村が図中に記載されていることからおおよその年代が知れる。

2 縄張り図

A. 渡部新一 〔図5-5〕

北塩原村在住の渡部新一氏が1986年11月21日に踏査し作図したもので、1987年に刊行された『北塩原村の城館柵』に掲載されている。柏木城跡は、「大塩集落の南方300m独立丘陵を利用した中世の山城で、大塩全体を一望にでき、東方は旧米澤街道の萱峠、西方は綱取城を指呼の間にできる自然の要

第5章 検討 ーこれまでの研究と今後の課題ー

衝地にある」と述べ、図には「本丸、二の丸、腰郭、西郭、三の丸、馬場跡」などが描かれている。大手口は南の虎口（本書虎口1）と理解している。『新編会津風土記』・『耶麻郡誌』における天正12年蘆名義廣築城とする記載については、天正12年10月の蘆名盛隆没、その後その遺児亀王丸が跡を継ぎ、天正14年11月に3歳で病死、その後を受けて佐竹義廣が天正15年3月に蘆名氏を継いだことを述べ、「大塩柏木城は天正12年蘆名盛隆により築城さる」とするべきと指摘している。またほかに、城番三瓶大蔵に関する一文もあわせて掲載している。

B. 佐々木修 〔図5-6〕

福島県教育委員会刊行の『福島県の中世城館跡』に掲載された。内容的には渡部新一氏縄張り図〔渡部1987〕に基づき、柏木城跡の概要について述べている。図は渡部新一原図と付記されるが渡部1987掲載の図とは若干異なっており、「本丸、二ノ丸、三ノ丸、腰郭、大手口、馬場」の他に、南側に空堀の表現が付加されている。

C. 松岡 進 〔図5-7〕

松岡2000、松岡2004a、松岡2004bなどに掲載の図面である。1985年に松岡進氏が作成したもの。「柏木城・中心部」として本書第3-1図に示す範囲が概ね図示される。その特徴を「中心部を東西に分割する堀切のみが大規模で、他は背後を含め遮断するための堀を設けていない。虎口はこの堀切に近接して西の主郭側に枡形、対岸に丸馬出があり、後者は唯一の開口部を食違い虎口にした嚴重なものである。また主郭南方には複雑な折れを伴う枡形が見られる。二つの枡形がいずれも石積みで固められているのも特徴的である。」とした。

D. 石田明夫

石田1999、石田2000、石田2007などに掲載の図面である（本書p54・55）。石田明夫氏が作成したもので柏木城中心部および、「東曲輪群、西曲輪群、北曲輪群」を含め東西約1.1km、南北約500mという広大な範囲を城域としている。本書で述べる柏木城跡中心部を「主郭」とし、東は馬出・曲輪4と北と西は帯曲輪、南は曲輪6及び水堀跡までをその範囲としている〔石田1999pp126〕。遺構については土塁や石積について現況観察に基づき分類を行い、「石堅め土塁、石張り土塁」や「石積石垣A類、石積石垣B類」として、城内の遺構を詳しく説明した。大塩集落側にある北曲輪群に大手口、そこから多くの屈折のある大手道を経て主郭の虎口2に入る経路を大手道とし、渡部新一氏が主郭南側の虎口（虎口1）に想定した大手口を搦手口とした。

E. 長島雄一

2007年に刊行された『北塩原村史資料編』に掲載されている。石田1999・2001をもとに柏木城跡を概観したもの。

F. 鈴木 啓

第1回全国城サミット資料集で、発表資料とされた。石田明夫氏作成図をもとに加筆したもの。主郭をめぐる帯曲輪、腰曲輪についてと、曲輪1区画Aの東出入り口と西の出入口は平入り虎口、馬出の南側出入口は食違い虎口であるとの指摘がある。

以上、主要な絵図や先学諸氏による縄張図とそれを基にした柏木城跡に関する見解を概観した。柏木城跡中心部の曲輪の配置については、主郭（曲輪1）とその周囲の曲輪2・3・4、馬出、帯曲輪、腰郭、曲輪6などについて、遺構の検討を行った先学の認識はほぼ似通ったものとなっている。近世城郭で多用される本丸、二の丸などの用語を使用する例があるものの、中心部の曲輪配置については概ね共通理解が得られているものとみてよいだろう。また、上記範囲については柏木城跡「中心

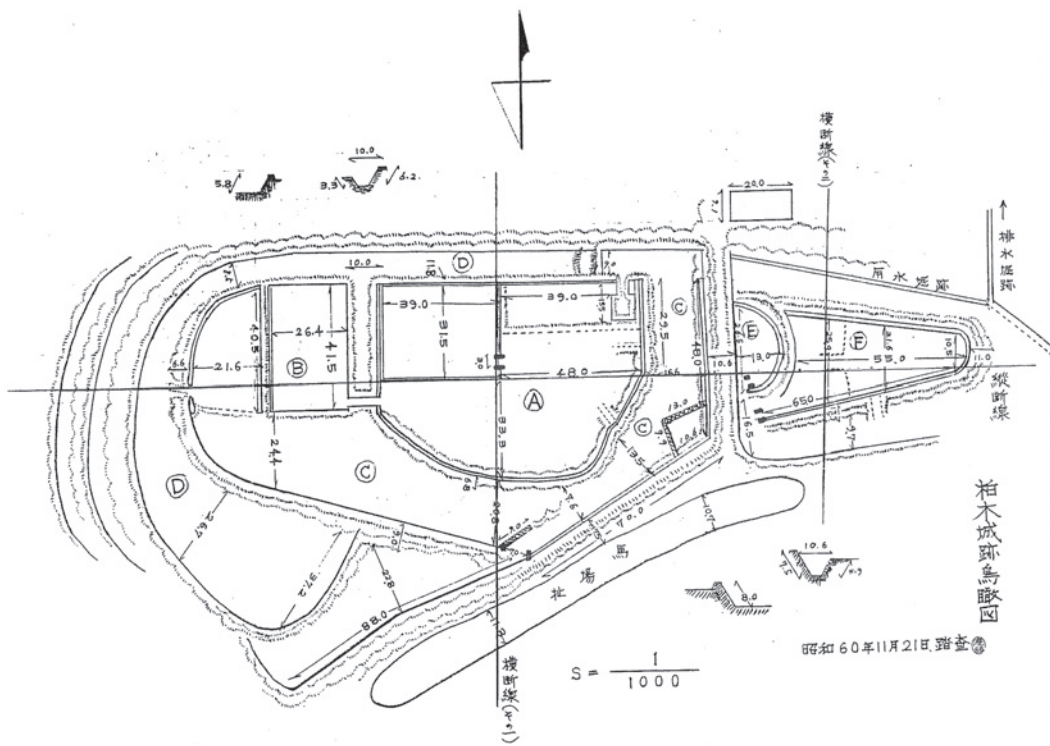


図 5-5 渡部新一氏縄張り図 [渡部 1987]

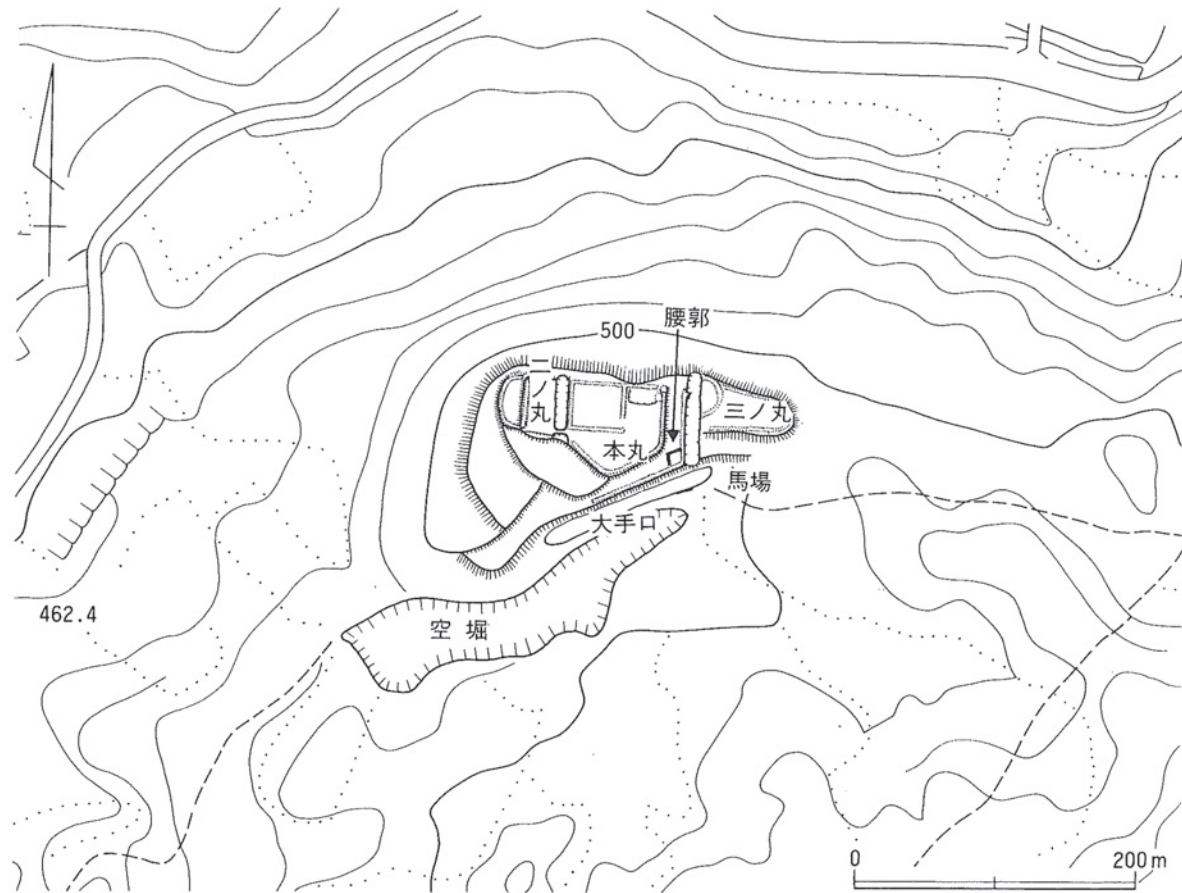


図 5-6 佐々木修一氏縄張り図 [佐々木 1988]

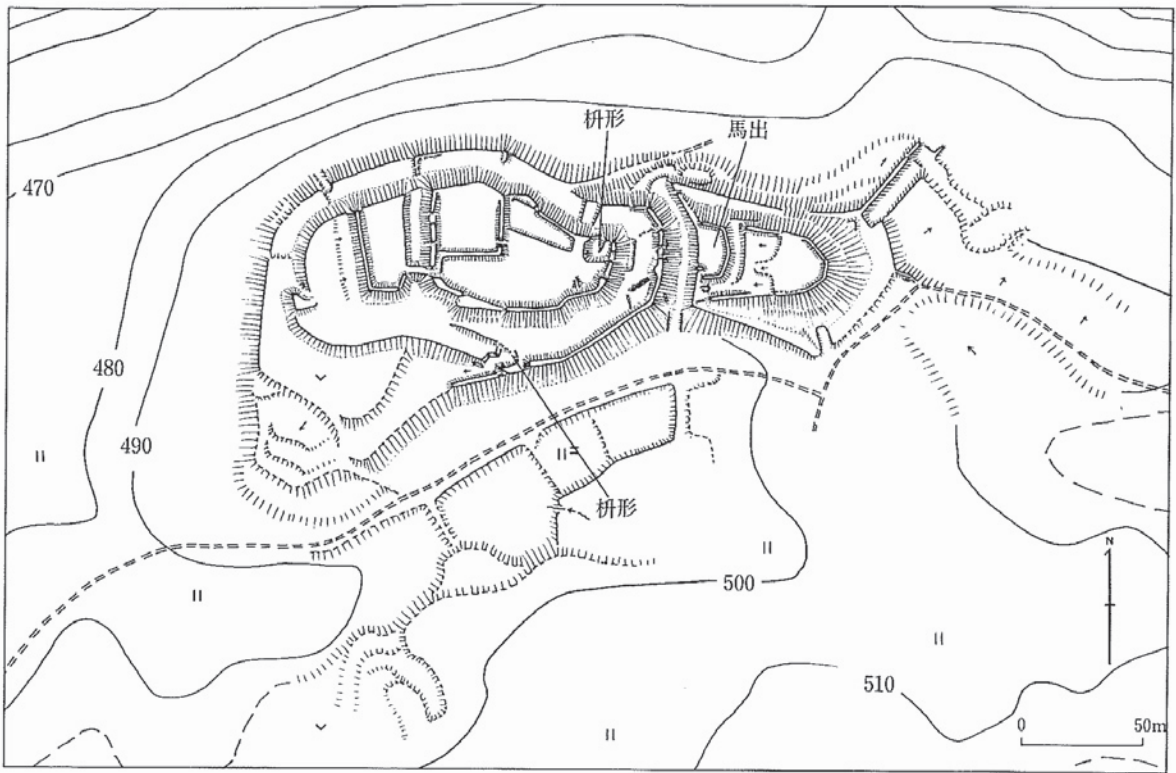


図 5-7 松岡 進氏縄張り図 [松岡 2000]
1985 年、松岡氏作成。

部」とする見解が松岡氏や石田氏の縄張図作成以降は一般的である。ただ、石田氏はその範囲を「主郭」としており用語上の違いはある。これは、石田氏が柏木城跡の範囲を広く見ていることによるものであろうか。

本書では柏木城跡中心部として上記の範囲を記載することし、石田氏の指摘する「北曲輪・西曲輪・東曲輪」など周辺については今後調査を行いその位置づけを検討することとしたい。

第4節 遺構について

1 石積み

柏木城跡中心部で目を引くのは、虎口や土塁、切岸、区画施設などにみられる石積みである。こうした石積みは、現況を観察する限り主たる傾向として以下の特徴がうかがえる。

- ① 一抱え程度の石を積石として使用する例が多い
- ② 石は正面が横長になる状態で積むことが多い
- ③ 石材は現地の地中や地表面の転石に類似する
- ④ おおむね垂直に近く積上げる、あるいは葺石状に斜面に貼る
- ⑤ 石積みの高さは1m程度のものが多い

戦国期城郭における石積みについては、近いところでは関東甲信地方など東国の城郭で使用される事例が1980年代後半以降蓄積され、研究も進展しつつある^(註1)、東京都八王子市の八王子城跡や群馬県太田市の太田金山城跡、山梨県甲府市の武田氏館跡などの発掘などからはその特徴の把握や系譜が

検討されてきている。

福島県を含む東北南部では石田明夫氏が柏木城跡や向羽黒山城跡を通して石積みのある戦国期城郭の知見を積み重ねるとともに、郡山市木村館跡の発掘調査では天正期の石積みされた虎口が発掘調査され、その構造や系譜について指摘がおこなわれている^{〔註2〕}。

柏木城跡の石積みについては石田明夫氏が仔細に観察・検討し報告されているので、ここで石田氏の研究を振り返ってみよう。石田氏の石積み、石垣等の分類は以下のとおりとなっている〔石田2001〕。「Ⅰ類石列　石を横に一列に組んだもので、施設の区画に使用される。

Ⅱ類石積　石を積上げて組んだもので裏込め石は無く、狭い範囲に限定されるもの

Ⅲ類石塁　石だけで土塁と同じように積上げたもの。

Ⅳ塁石積石垣　表面は石垣と変わらないが、裏込め石が無い。垂直に近く積上げる。

Ⅴ類石垣　裏込石がある。野面積、布積、切込みハギ、打込みハギ、算木積などがある。」

これは城郭における石（礫）の使用のされ方を説明したもので、それらに関し、石の積み方に違いがあるとして、「構造上石が使用される組み方には、a類、横使用で奥が短いもの。b類、奥が短いものと長いものとが混在するもの。c類、縦使用で奥が長いものことがある。初期段階はa類が主であり、柏木城跡などの天正年間の石積石垣はa類である。慶長5年（1600）の神指城跡では、b類へと変化し、その後、仙台城跡のⅡ期石垣のようにc類へと変化する。」と東北地方南部での事例をあげてその変化を説明しつつ、柏木城跡の石積みについても述べている。

そして柏木城跡に見られるような「その石垣は、裏込め石の無い石積石垣〔石田1999〕と呼ぶもので、東北地方南部を中心に・・・（中略）・・・約40ヶ所存在している」^{〔註3〕}と述べ、「城館跡の構造変化は、長槍の登場により土塁が高く、堀幅も広くなり、鉄砲の登場により石積石垣が登場、虎口が複雑化する」〔石田2001〕、また、「武将によって石積石垣を取り入れる時期が異なり、関東の武将北条氏と葦名氏は、天正10年頃に導入します。伊達氏は、葦名氏より遅く天正12年より後で、上杉景勝や佐竹義宣は、文禄・慶長の役まで石垣の技術を導入しませんでした。」、「柏木城では、石垣のように見えるものすべてが石積石垣で、この城の特徴といえます」〔石田2007pp42〕として、石積みのある城館の分布状況や石積み出現の歴史的な背景、戦国大名ごとの石積みの採用時期についても言及した。

松岡進氏も「柏木城で今ひとつ注意を引くのは石積みの使用である。副郭の枳形内に見られるほか、南側の城外に開く枳形に、細かな折れをもつ石積みが使用されているのが今もよく残っている。虎口部分を意識して石を用いたことが明瞭である。石田明夫氏によると同じ北塩原村の綱取城や猪苗代町の弦峯城でも石を使用して虎口がつくられており、・・・」〔松岡2000〕、「この地域全体としても、近世城郭の石垣とは違うが石の積まれている例が多い」〔松岡2004a〕とする。

柏木城跡の石積みについては「この地では天正18年以後の改修が考えられないうえ、小振りの石材を垂直的に積み上げた技術は織豊系との相違が明確で、蘆名の築城技術の頂点と評価してよい。」「松岡2004c〕と述べている。

以上、柏木城跡については石積みが特徴的であることは明らかであり、加えて虎口をはじめ土塁、石塁や切岸などに多彩に使用された石積みが多く場所で遺存していることも、天正後半期に築城から廃絶までが比定される城郭としては県内でも稀な例であると指摘しておくことができよう[図5-8]。

上記した石田氏による石積みの系譜論や戦国大名による導入時期に関する指摘では、地域の自立的な発展による導入とも、あるいは他大名など他地域からの技術導入によるものとも受け取れるが、それらを当地で把握するにはまだ多くの作業が必要とされる。城内のどの場所でどのような積み方がなされているかという点のさらなる確認や、使用石材、工具痕の有無などをより詳しく見つつ、会津、

および東北南部そして関東甲信地方など、周辺諸城と比較をすることが必要となろう。それを可能とする基礎的な情報が、柏木城跡には多く残されているとみることができよう。

2　虎口

　柏木城跡中心部における出入り口は、主なものとして

・主郭（曲輪1）区画A東側出入口（虎口A-1）・・・平入り虎口

・主郭西出入口（虎口A-2）・・・・・・・・・・平入り虎口

・主郭北東出入口（虎口2）・・・・・・・・・・枳形虎口

・曲輪3西出入口（虎口3）・・・・・・・・・・食い違い虎口

・帯曲輪1南出入口（虎口1）・・・・・・・・・・枳形虎口

・帯曲輪1北通路内の虎口2手前（虎口O1-1）・・・連続虎口（枳形なし）

・馬出南側出入口（虎口U1）・・・・・・・・・・食い違い虎口

・曲輪4南西出入口（虎口4-1）・・・・・・・・・・食い違い虎口

　などが確認される[図5-8]。主郭内やその付近での出入り口に関しては平入りとし、その他曲輪への出入口に関しては食い違い虎口や枳形虎口を併用していると判断される。

枳形虎口である虎口1・2に関しては、虎口1は柏木城跡中心部をほぼ周回する帯曲輪1への出入り口であり、外部からの入口正面に大平石^{〔註4〕}を置き、ほかの壁面でも石積みを伴うこと、そして虎口を入ったのちは帯曲輪1南通路とした幅の広い直線通路が続くことから柏木城内でも重要な出入り口であり^{〔註5〕}、それらを経由しての虎口2も主郭（曲輪1）への出入り口であることを踏まえれば、城内で最も重要な出入り口であると理解されよう。

　そうした重要な出入り口で枳形虎口を採用する点については、松岡氏が伊達氏系の戦国期城館を検討するなかで述べた「伊達氏系城館には、後北条氏系や織豊系城郭に顕著な、戦闘空間としての曲輪を連ねて防御力を高めるという発想が基本的に希薄である。軍事的に発達した虎口のほとんどが主郭ないし中心部かまたは大手の虎口であるのも、この事情と照応している。」「松岡2002pp172〕という指摘を想起させる。そしてこの指摘は、伊達氏系の城館に限らず蘆名氏の城である柏木城でもあてはまり、後に松岡氏が、東北南部戦国城館の地域的な特質として述べるように「導入系の技術においては、馬出や食違い虎口、横矢がかりの事例が地域を越えて点在するのが著しい特徴」であり「定型の枳形を援用」〔松岡2004〕する傾向が強いと把握される特徴を具備しているものと理解できよう。

　一方、石田氏は、「北東部分に一部石積みされた内枳形の虎口2がある。」、帯曲輪1の「南側には石積石垣B類の内枳形の虎口1がある。」「石田1999〕とするほかに、④曲輪3西出入口は「西側に石積石垣A類の内枳形の虎口3がある。」、⑦は「石積石垣B類で内枳形を伴う丸馬出で防御されている。」、曲輪5には「西から延びる農道がぶつかる部分に石積石垣A類があり、内枳形虎口があったと推定される。」「石田1999〕と述べ、各虎口を積極的に枳形虎口とみて柏木城跡中心部での枳形多用を説く。ただ石積みの度合いや広さなど虎口1・2と比べると作りが簡素なのは明らかであり、枳形虎口の類型化を含め再度検討をおこなう余地があるのではなかろうか。

　もうひとつ注目されるのは、虎口2付近で帯曲輪1北通路内にある多数の屈折を強いる坂虎口（虎口O1-1）である[図5-9]。こうした形状の虎口は連続虎口と呼ばれ、「伊達郡の山間部にある境目の主城」である福島県伊達郡川俣町の河股城跡を例として[図5-10]、「主郭南側の虎口は緩い傾斜を三度折り返して登っていく形態で、枳形をもたない連続虎口の一事例と考えられる」〔松岡2002〕とされ、これも伊達氏系城館の特徴の一つとされている。

松岡氏は城館縄張図や関連する文献の検討から、伊達氏系城館の虎口は、Ⅰ期（天正初年以前）2折0区画、Ⅱ期（天正12年まで）食違い虎口＋連続虎口（枡形なし）、Ⅲ期（天正13年以後）連続虎口（枡形・馬出含む）＋2折0区画およびそれに準じるものという三段階によって把握されるとし、「伊具郡の伊達領国化天正12年という比較的早い時期に金山城などの直轄支城化によって一段落した」頃、「この段階での最新鋭の虎口形態は、明確な枡形を含まない④（連続虎口）だったのである」として、虎口の時間的な変遷も述べた。

天正12年に家督を継いだ伊達政宗は、天正13年以降松原城をはじめ多数の城を築く。それとあわせ伊達氏系城館では最新鋭の虎口形態が枡形をもたない連続虎口から枡形をもつ連続虎口へ変化するという指摘を踏まえるならば、築城者が蘆名氏であるとしても、築城年がまさにこの天正12年から13年とされる柏木城においても枡形をもたない連続虎口が採用されているのは年代的には整合していると思われる。

現地を見れば、柏木城の連続虎口O1-1は、帯曲輪西からの幅のある長い通路が続いた後の主郭（虎口2）に入る直前に位置している。したがって大勢による容易な虎口2への出入りを防御すべく計4回の屈折を強いる虎口としたと思われ、熟考された配置であるように思われる。やはり築城時に築かれたものとみるのが自然であろう。

こうした連続虎口に類するものについて、石田明夫氏は柏木城中心部北側の城への登り口部分で虎口に複雑な曲折が見られることを指摘しており^{（註6）}、今後蘆名氏のほかの城館についても精査が必要となってこよう。

柏木城跡については虎口1・2をはじめ石積みが崩れかかっている箇所が多く、現況の確認や、当時の状況の復元、形態の比較検討のためにも発掘調査による記録と検討が求められる。

3 馬出

馬出の特徴は、村田修三氏による言をひけば「城門の前に設けられた小さな郭の一種で、敵の攻撃から虎口を守り、城兵の出入りを確保するための施設。堀を越えて外に張り出し、前方にも堀を回して囲むので、一見、堀中の島のように見える。・・・馬出の前・左・右の三面には土居を築いて虎口への透視を妨げる。・・・急峻な山城では、馬出の前後ともに空堀を設けることができないので、背面は上段から下降する壁面でもって堀に代える。・・・逆に前面を急な下降斜面のままとし、背面に空堀土橋を設ける形もある。・・・」〔村田1981〕と説明されている。

柏木城の馬出は背後に堀切1があり、前面に弧状の土塁と空堀があることと、堀切1には対岸から木橋がかけられていたとみられる部分が存在する〔石田2007〕ことから、ここを出入り口とみれば馬出としての条件を備えている。この馬出については、松岡氏が「馬出について興味深いのは、外に対する開口部が一つしかなく、しかもその内側に小さな土塁が張り出して、食違い虎口になっていることである。」「松岡2000」、また「食違い虎口をもつ丸馬出は特異なもので、虎口を中心として石積み



図5-9 河股城跡の連続虎口〔高橋ほか2002〕を引用・改変



図5-8 柏木城跡中心部曲輪1への進入路（石田明夫原図を改変）

を多用している点も注目される」〔松岡2004c〕と述べるように、出入口は南側の1箇所とみられ、北側は堀切1東土塁の上に出てしまう。また前面の土塁も低いものであり、出撃に当たっての出入りがこれにより確保されるとは言いがたい側面を持つ。加えて、この馬出は前面が城外ではなく曲輪4であり、しかも曲輪4のほうが馬出の平場よりも高くなっている点も注意が必要である。

これについては虎口U1-1の造作も含め「馬出の前面の空堀が小規模なのに対し、背後の堀切は強い遮断を実現しており、その限りではこの馬出は橋頭堡というにふさわしい攻撃的な立地を示すが、構造自体は出撃性を犠牲にして動線を複雑化し、防御を固める性格の強いものといえる。」〔松岡2000〕という評価が示すように、馬出のもつ攻撃的な側面はうかがいにくいものと理解できるが、逆に言えば前面が曲輪であるから土塁も低く、空堀も浅いということなのかもしれない。むしろ曲輪4についてみてみると、周囲を土塁で囲み、外側を高い切岸で画している点で、前記した村田氏の馬出の説明にある「前面を急な下降斜面のままとし、背面に空堀土橋を設ける形もある。」という条件に近い。出入口が南側一方（虎口4-1）であるものの、馬出に類するものとみることができるのではないだろうか。

馬出と曲輪4への進入路は帯曲輪2bからの坂路であり、こちらへは曲輪4土塁からの防御が可能である。また東方向外部からの攻撃に対しては高さのある切岸の上から見渡せることなど踏まえると、東側外部からの進入に対する防御の中心的な機能を曲輪4が担っていたことがうかがわれる。また、長く東に伸ばされる曲輪4は、堅堀1と堅堀2そして長く南北に伸びる石塁で構成される防衛ラインよりも東に張り出しており、橋頭堡と呼ぶにふさわしいと思われる。

馬出は曲輪4内まで敵兵が上がってきた際に機能するとみられる。また、そこでの防御に際してはより高さのある帯曲輪1東土塁や主郭（曲輪1）東土塁からの支援も期待できる位置関係といえる^{〔註7〕}。

4 弧状石積み

柏木城跡には、帯曲輪1の南東に、石塁、石積みと土塁によって区画された施設がある。この区画については、渡部新一氏が「食料庫らしき石積の基礎・・・」か、とその存在を指摘し〔渡部1987〕、石田明夫氏も「南東部分には、石塁で区画された部分があり、鉄砲等に使用した弾薬を保管した倉があったと考えられます。」〔石田2007〕と述べるなどその性格についても諸説ある。発掘調査の行われていない現状では如何とも言いがたいが、幅の広い直線的な通路である帯曲輪1南通路の突き当たりであることから、馬屋などがあった可能性も視野に入れるとともに、石積みの技術的な特徴を把握することに留意して今後発掘調査等をおこなうべきであろう^{〔註8〕}。

第5節 柏木城跡中心部の構造について

柏木城跡中心部については、主郭（曲輪1）を中心とした副郭及び帯曲輪1と、東側、つまり桧原方面からの伊達方の進入に対する防御の意識を強く感じさせる馬出・曲輪4・堅堀・石塁からなる部分があり、両者は堀切1によって分けられている。

主郭（曲輪1）は北側以外を土塁で囲みつつ、土塁上への坂路や櫓台も設けられ、曲輪内での守備が容易となる工夫がされている。曲輪2との間には空堀があり、土橋がかかる。すぐ近くには木橋もかけられていた可能性もあり、これも曲輪内での移動を容易とすることを企図したものと評価できよう。曲輪3は土塁による防御はないが、西にある虎口3は通路に切岸と土塁が配されており、帯曲輪

1西通路からの進入は容易ではない。

主郭（曲輪1）への出入口は虎口2と思われ、石積みを伴う枡形虎口となる。この虎口2へのルートは帯曲輪1であり、西からと東からの2方向から進入が可能であるが、西からの侵入は連続虎口でさえぎられ、もう一方は、石積みの枡形虎口である虎口1を経て幅広の通路（帯曲輪1南通路と東通路）を通る。帯曲輪1南通路は主郭の南と東の土塁から見下ろされ、防御に易く攻めるに難となっている。

中心部東側では、曲輪4が高さのある切岸や土塁が圍繞する平場を形成し、その北側に堅堀、南側に堅堀と石塁を配し、柏木城と南側の山斜面との間にある緩斜面にも遮断線を形成している。

曲輪4とともに設けられた馬出・堀切1については、馬出の虎口が石積みのある食違い虎口で堅牢なものであり、また、馬出内部に関しても堀切1対岸からの応射が可能であることから、東側から帯曲輪1で圍繞された主郭側への進入を容易でないものにしている。

石塁は柏木城寄りの北側が損壊しているが、城近くまで伸びており、損壊している部分で虎口が築かれていた可能性が指摘されている^{〔註9〕}。交差する方向に現在の農道が通るので、この通路が当時も虎口を経て外部に接続するものであったかという点や、石塁についても、石積みとともに柵などの使用の有無について確認が必要となろう。

柏木城中心部南側の、西から東に幅広く通路状に延びる曲輪6は、高さがある切岸の上にある帯曲輪1に守られつつ、東側の曲輪4や石塁方面へ大量かつ迅速に守勢人員を送り込むことが出来る。また、主郭・帯曲輪1方向へも、坂路を上り虎口1を経ることで虎口2近くまでスムーズに到着できる。曲輪6は『新編会津風土記』に記される「馬場」と比定されることが多いが、蘆名氏本拠地である会津盆地方面に直結し、大軍の集結を可能とする大久保口の通路として、まずはその役割が期待されたものではなかろうか。

こうした柏木城跡の特徴は、松岡進氏が「中心部を東西に分割する堀切のみが大規模で、他は背後を含め遮断するための堀を設けていない。虎口はこの堀切に近接して西の主郭側に枡形、対岸に丸馬出があり、後者は唯一の開口部を食違い虎口にした嚴重なものである。また主郭南方には複雑な折れを伴う枡形が見られる。二つの枡形がいずれも石積みで固められているのも特徴的である。」〔松岡2004a〕と端的にまとめている。

第6節 他地域との関連について

天正4年（1568）、織田信長が築城した安土城は、高石垣の導入で戦国期城郭にあらたな画期を加えた。また先にみたとおり天正期後半には東国でも城郭内で石積みを用いる事例が増える。一方松岡氏による伊達氏系城郭の検討で天正13年以降枡形を伴う連続虎口が特徴的となる中で「織豊系城郭で外枡形や馬出の形態が完成するのとほとんど同時に、伊達氏系城館に類似の定型化した技術が採用されている点にも注意が必要である。」〔松岡2002〕とされるように、東北南部地域でも大きな変化が認められる。両地域の変化がなんらかの影響下にあるものなのか、あるいはそれぞれの事情により地域内での系譜がたどれるものなのかは今後とも検討が必要であるものの、柏木城でも、石積みや大平石、枡形虎口など天正期に他地域の城郭でも導入が顕著となったとみられる技術が使われている。こうしたいわば天正期の新技術について石田明夫氏は「葦名方は石積の使用や平場の大型化など関東の技法をいち早く採用している。」〔石田1999pp137〕、「柏木城跡は、典型的な守り城として、天正12年（1584）に、葦名氏が関東、中部、関西の最新技術を導入し、総力で築いた東北地方を代表する若

松城跡以前における石垣の城である。」〔石田2001pp85〕と評価した。

そして「葦名氏は、信州の守護であった小笠原一族を、武田氏が滅び再興するまで保護していることや、武田家家臣の馬場一族を引き取ったこと、天正九年（1581）には、安土城の織田信長に使者を送っていることから、各地から様々な築城技術を導入したと考えられる。戦国期の東北の城館跡のなかで、天正十二年（1584）に築城した柏木城跡と、葦名氏・伊達氏の改修と考えられる向羽黒山城跡はその代表といえる城郭である。」〔石田2001pp104〕、「この城に丸馬出の遺構があるということは、葦名氏が武田氏系の影響を受けたということを示しています。」「天正10年に武田勝頼が秀吉に滅ぼされると・・・葦名氏も馬場一族をはじめ家臣を引き取っています。このことにより、甲斐や信濃で発達した丸馬出の技法が会津にもたらされた可能性があります。」〔石田・佐藤2007pp41〕として、その歴史的な背景についても説明を試みている。

柏木城の馬出については、その土塁の形状が弧状というよりもやや隅を意識した形状であることもあって、本稿では「馬出」とのみ記載するにとどまったが、東北地方における馬出については、「十五世紀に馬出の出現を見たのは全国的には最先進とさえいえる」、「馬出の分布の広さも、曲輪から堀を隔てた対岸をさらに堀で画すというその形態が、堀を主体とした陸奥の城館の基本形態から隔たりの小さいものだったからだろう」〔松岡2004a〕との言もあり、武田氏や北条氏を代表とする地域の馬出の導入という視点で解決される事柄なのか、今後とも慎重な検討が必要となろう。「丸馬出」の特徴的な技法を武田氏という戦国大名が多用していたことは事実としても、それを独占していたというわけではない点も問題を複雑にしている。大名領域を越えた地域での築城技術の使用について思慮すべきことは多い^{〔註10〕}。

第 7 節 柏木城跡の範囲

本書で述べてきた柏木城跡中心部の範囲の外側にも、平場や石積みは広がる。先に述べたとおり中心部の外側については、今後現地調査や検討を行い石田氏の図面や指摘事項について確認、精査を行っていく段階にあるが、ここで現時点における石田明夫氏の見解を確認しておこう。

- 「遺構は大きく主郭部分と、それを取り巻くいくつかの曲輪群、北に面して造られた外構、南側の堀跡に分けられるもので、伊達氏の侵攻を防ぐことを主として葦名氏が築いた城郭であることがうなずける。」〔石田1999pp126〕
- 「伊達政宗の会津進攻を察知し、北塩原村の綱取城跡に代わる守りの拠点として天正12年（1584）に葦名氏が・・・柏木城跡を築いた。この城跡は、東西約1.1km、南北約500m、面積約50haという規模の大きなものである。」〔石田2001pp98〕
- 「城に入るには、大手口の他にも北に面し四箇所の虎口がありました。門は、敵の北側に面して石積石垣を使用した高度な建築技術によって造られ、その内側は、門から中心部へ折れ曲がりを用いた登城ルートが待ち構え、その複雑さ、嚴重さをわざと見えるようにしています。」〔石田・佐藤2007〕
- 「城は、大規模な外構で守るだけでなく、北の大塩川と東の蟹沢川を最終的な外郭となるよう工夫して造られ、内側には街道沿いに宿屋や塩の生産をしていた町屋を建つ城下町が造られていました。」〔石田・佐藤2007pp36〕
- 「大塩川に架かる大塩橋の南には、高さ10m以上の断崖の下に街道沿いに配置された城下町がありました。」〔石田・佐藤2007pp40〕

などが主として述べられており、広大な城域をはじめ城下町の存在までもが示唆されている。

柏木城跡中心部の検討からは、帯曲輪 1 や曲輪 3 などについては東側・南側については土塁もあり、防御についての意識が強く感じられるのに対し、北側・西側に土塁はなく、急斜面とその斜面の下側にある平場群（石田氏の言う北曲輪群・西曲輪群）が広がっている。

北側は、急斜面があるとはいえ主郭や帯曲輪1の防御が手薄い状況であることは明らかであり、北側・西側の平場群とも一体的となって城郭を構成していた可能性は高く、石田氏の指摘は卓見といえよう。

また、このような斜面で連続する平場群については、「考古学的には、河股城（福島県川俣町）の発掘調査で注目された段状遺構（コの字状小平場）が、臨時的な居住(駐屯)の多様な展開を示唆する。」〔松岡2004a〕と指摘される事例があり、類例として比較を進める必要があるろう。

一方石田氏の指摘する「中曲輪群」「東曲輪群」については、本書でも指摘した馬出・曲輪 4 ・堅堀・大石塁などからなる防御ラインの外側に展開するものである。「中曲輪群」は「北曲輪群」と同様に斜面で雛段状に連続する平場群であることが特徴で、「東曲輪群」も含めた防御施設やその配置などから、どこまでが柏木城中心部と一体的に築かれたものなのか、検討していく必要がある。あまりに広がりすぎた城域は、守備に要する人員も多数が必要となり、駐屯地の可能性があるにせよ、防御施設の工夫で補える範囲にも限度があるはずである。

第 8 節 性 格

柏木城跡は、これまでに見てきたように、伊達氏に対する蘆名方の領地「境目の城」である。石田氏は「この城跡は、天正12年に葦名氏によって綱取城に代わり築かれたもので、伊達政宗に対抗するための防衛拠点であり、当時の石垣や柵形など関東地方の技法を取入れ、先端技術を駆使して築かれた境目の城である。天正13年 5 月には伊達政宗が新たに檜原城跡を築き、会津侵攻の前線基地とした。そのため、それ以後ますます柏木城の重要性が増し、天正17年（1589）の摺上原の戦いまで改修は続いたものと見られる。」〔石田1999〕、「守りの城跡 敵の進攻を喰い止めるための城跡で、敵に面した部分は嚴重に作られている。また退却ルートも確保されている。・・・柏木城跡がそうである。」〔石田2001 pp87〕などと述べ、松岡氏も「この城は、天正12年（1584）に伊達政宗の会津進攻に備えて蘆名側の境目の城として構築された。」〔松岡2000〕とする。

伊達氏の領する米沢から会津への最短となる進入路が、桧原から大塩を抜けて小沼を経て黒川へ向かうルートであり、天正13年、伊達氏が桧原に拠点を築いた後は、山間部の谷あいでは桧原方面の細野や猪苗代からの磐梯山を北に迂回するルートの合流点である大塩の柏木城が、会津を守る防衛拠点であったのは、地形的にみても納得できる。大塩が抜かれ、会津盆地に攻め込まれてしまうと、会津盆地内での移動はさまざまな方向・経路から可能となり、これを守備するのは困難となる。

松岡氏が「これを攻撃したのは伊達方軍勢Bであったが、攻略以前に摺上原での蘆名主力の崩壊によって自落している。つまり、この城は、スケールの大きな城域を維持できる大兵力の運用を背景として初めて十全に機能するものであった。そして、境目防衛の拠点がこうして開城してしまった事態が、続いてほかの蘆名方拠点がほとんど自落する引き金となったのは明らかである。」「柏木城は会津蘆名方の防衛拠点の要であり、「領域」の境界を固める軍事性の強い城館。」〔松岡2004c〕^{〔註11〕}と述べるように、蘆名領国境目の城として、柏木城が落ちることがあれば会津盆地北半の守りも成り立たなくなるほどの重要な役割が与えられていたものと理解することができよう。

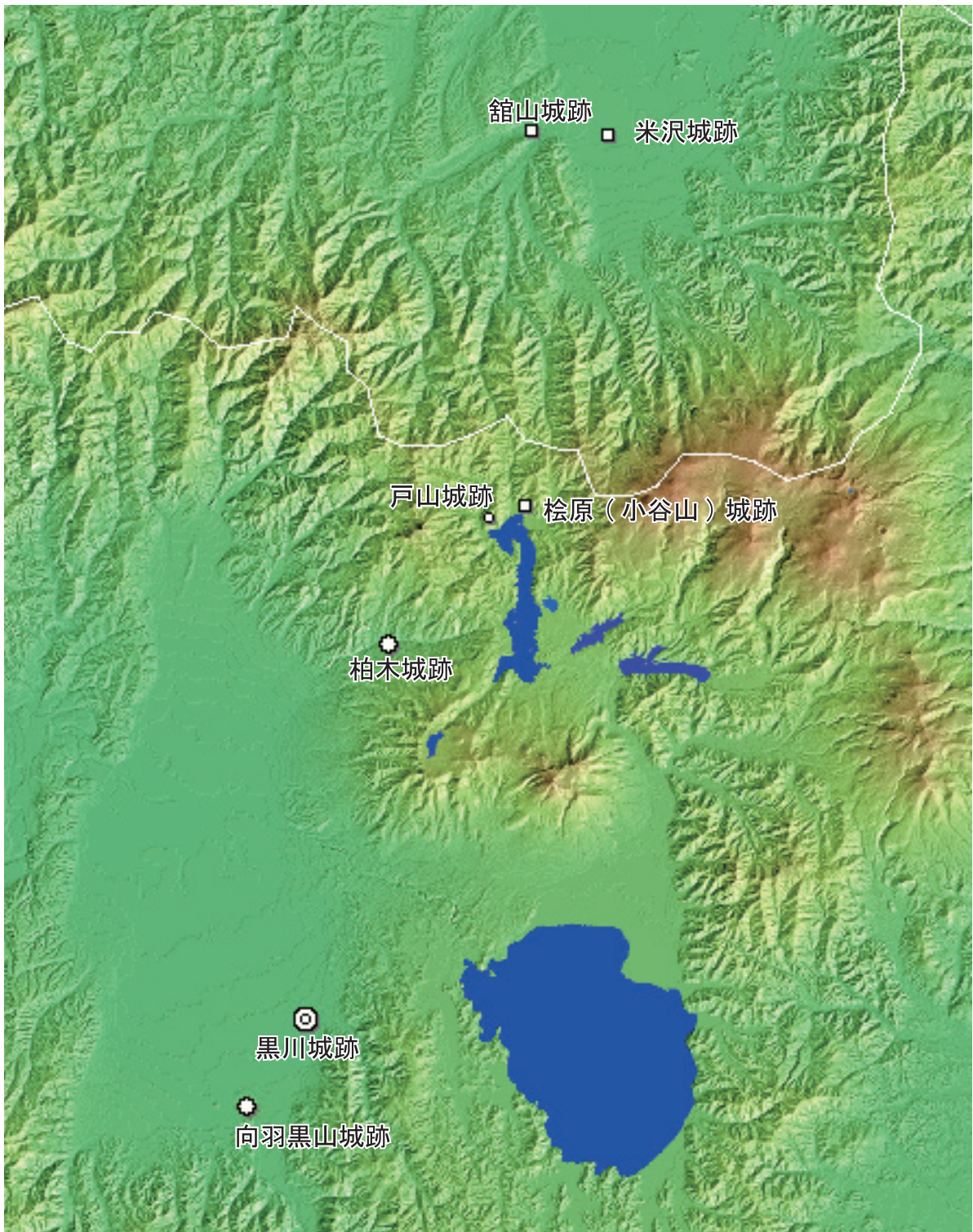


図 5-10 主要城郭位置 (KASHMIR 3D で作成)